

はじめに

みなさん、ご入学おめでとう。心から歓迎します。

みなさんが本学に入学されるについては、さまざまな要因や事情が作用したものと推察されます。しかし、今はもう花園大学の学生としてこの場におられることも動かしがたい事実です。みなさんと本学とを結びつけたものが何であったのかは判然とはしませんが、結びつける何かがあったことは否定できないと思います。それを仏教的には、たぶん、「縁」と呼ぶのだと思います。

ところで、みなさんは、原因が同じなら、そこから出てくる結果も同じだと思われるかもしれませんが、実は違うのです。原因は直ちに結果するのではなく、その間には「縁」が介在していて、その「縁」のありようによって、結果は異なってきます。たとえば、水という液体が原因であるとしても、温めれば水蒸気という気体になるし、冷やせば氷という固体に変化します。つまり質が変わるわけです。問題は温めるのか、冷やすのかということになるのですが、この加熱や冷却のことを仏教的には「縁」と呼んでいるのではなかろうかと、仏教的には素

人の私は社会学的に解釈するわけです。

「縁」を別の言葉で言うならば、まさしく「人間と人間の関係、人間と集団の関係」ということになるのではないかと私は考えます。関係のありようによっては人間が如何ようにも変わるわけですね。人間と人間、人間と集団の関係の中で最悪の形態をとるのが、諸々の人権侵害であるとか、差別の問題であるわけです。

我々の大学のバックボーンは臨濟禅ですが、それと同時に反差別と人権拡張の課題を教育と研究の重要な柱として建てています。そういう意味で実にユニークな大学だと思のですが、私はその中で人権教育研究委員会の委員長と、研究機関である人権教育研究センターの所長とを兼ねている八木晃介と申します。以後、お見知りおき下さい。

人権講演会を入学後の公式行事の第一弾においているのも伊達や酔狂ではありませんで、本学が差別や人権侵害の問題とまともに向き合おう、学問的に解明していこうという姿勢をもっているということの一つの現れであります。そうは言いながらも、我々の取り組みはまだまだタテマエの水準に止まっているといわざるをえません。

しかし、それでもタテマエに止まりがちなの領域をできるだけホンネに近づけていくという作業も継続してはいるつもりです。今日からはみなさんにもその作業の中に加わっていただくということになります。

本日は、本学の非常勤講師をお願いしている社会学者の堀江有里さんにお話していただきます。広い意味でのいじめの構造がお話のテーマですが、まさに差別と人権侵害のことを「いじめ」とおっしゃっていると思います。特にセクシュアル・ハラスメントの問題、さらにはキャンパス・ハラスメント(花園大学ではセクシュアル・ハラスメント以外のハラスメントのこと、たとえばアカハラとかパワハラというのを、ひっくるめてキャンパス・ハラスメントと呼んでいます)の問題に特に力点をおいてお話いただけるはずですよ。

みなさん一人ひとりには疑いもなく権利性の主体であって、十分自己の権利に自覚的になっていただきたいのですが、同時に他者の存在に対する想像力をも豊かに養ってほしいという思いも込めて今日の設定となりました。みなさんにお配りしたたくさんの資料の中でも、とくに本学の『セクシュアル・ハラスメント防止に関するガイ

ドライン』、『キャンパス・ハラスメント防止に関するガイドライン』のリーフレットを穴のあくほどよく読んでください。不幸にして、こういう事件が起きないという保障は、我々の大学に限らず、どこの大学にもないわけですし、もしかするとみなさんが加害者になったり、被害者になったりする可能性もないではないのであります。そういうことも念頭におきながら、よくよく『ガイドライン』をお読みいただきたいと思います。

それでは堀江先生のお話をうかがいます。堀江先生、よろしく願いいたします。

2007年4月3日

花園大学人権教育研究委員会委員長・人権教育研究センター所長（文学部教授）

八 木 晃 介

いじめの構造

— 大学でのハラスメントを考える —

堀江 有里

(花園大学非常勤講師)

●はじめに

皆さん、初めまして。花園大学へご入学おめでとうございます。ただいま八木先生からご紹介いただきました堀江有里と申します。よろしく申し上げます。わたしは花園大学の非常勤講師です。つまり、パートタイムの教員です。担当している科目は、「人権」(前期・ジェンダー論、後期・セクシュアリティ研究)と「生涯学習概論」です。

今日は、わたしの好きな言葉をご紹介したいと思います。こんな言葉があります。「かけがえのない、たいしたことの無い私を生きる」という言葉です。これは、田中美津さんという人の言葉です。田中美津さんは鍼灸師

です。いまから30年ほど前、1970年代のはじめに、日本で起こった「ウーマン・リブ」と呼ばれる運動にかかわった人です。みなさんは、「ウーマン・リブ」という言葉を聞いたことがありますか？　すごく簡単に言ってしまうえば、ウーマン・リベレーション、つまり女性解放運動のことです。田中美津さんは、「ウーマン・リブ」にかかわった、ある意味で“カリスマ的な”存在としてとらえられている一人であると思います。

30年ほど前というと、わたしも物心つかない頃だったので、当時の記憶はほとんどありません。社会人になって、ようやく、自分が「女性である」ことの意味、置かれた位置を考えるようになりましたので、時代的には、ずいぶんと後に、時間が経ってから、田中美津さんの言葉と出会いました。

● 「ウーマン・リブ」の時代

とにかく1960年代後半から70年代にかけて、たとえば日本とアメリカ合衆国の軍事同盟が改悪されていったりする状況のなかで、少なくない人々が、社会を変えていこうと動いていました。大学やさまざまな場で、国のあ

り方の問題や、向かうべき方向を問いつづけていたわけです。遅れてきた世代のわたしにとっては、人々が「変革」を求めた時代、というイメージがあります。しかし、国のあり方、そのなかでの大学のあり方を問う人々、そのために闘っている人々のなかにも、さまざまな「格差」の問題があったようです。たとえば、集まっている人たちのなかで、性別によって役割分担があった。女性たちは、みんなが集まっている場所の掃除をしたり、ご飯づくりに駆り出されていたりしたという証言も少なくはありません。一方で、男性たちは「変革」のために、方針を立てたり、学校と交渉したり、話し合ったりしている。しかし、多方で掃除や食事づくりに駆り出される女性たちは、その場を中座しなければならなかったのも事実です。

また、こんな話もあります。社会を変えていこうという闘いのなかには、いくつかのスローガンがありました。そのなかには、「性の解放」というスローガンもあったようです。束縛されている状態を「解放」しようとすることは、良いことのように聞こえるかもしれませんが。しかし、その「性の解放」という言葉のもとに、女性たち

に対して合意のない性行為が強要されることがありました。これも証言として残っているわけです。男性たちにとっての「性の解放」は、一方的なものであって、少なくとも女性たちがレイプの被害にあってきたということです。その後、時間を経過して、その被害を語ったり、書いたりする女性たちがいて、わたしはそれらを聞いたり読んだりすることで、そこにある「現実」と出会ってきました。つまり、世の中を変えていこう、とした人たちのなかでも、その群れのなかに、このような格差の問題、差別の問題があったということです。「ウーマン・リブ」には、いくつもの側面がありますが、このような性差別の「現実」も、女性たちがつながり、立ち上がっていったひとつの要素であったようです。

田中美津さんは1943年生まれです。「ウーマン・リブ」に参加していた当時、20代後半から30代前半くらいの時期でした。東京でこの運動に参加していた女性たちは、「優生保護法」という法律が改悪されるかもしれないという状況のなかで、抗議のために国会の前に座り込んだり、東京・新宿にマンションの一室を借りて、そこに拠点をつくっていく。もちろん、田中美津さんだけではな

く、仲間たちでつくっていくわけです。そのマンションの一室で、血縁の「家族」のあり方とはちがう方法を模索しようと、共同生活も行われていました。女性たちが集まって、子どもを産んだり、育てたりしている人たちもいたので、子どもたちも一緒に生活をしていく。つまり共同で女性たちが集まって、そこに「お父さん・お母さん・子ども」というユニットではなく、共同の子育てをしていくというスタイルをとり、共同体をつくっていた時期もあったようです。日常生活のなかでは、とくに子育ての時期には、なかなか女性同士の横のつながりを持つことかできない。つまりは、分断されている状況だと思えます。その分断をつないでいこうという努力を、「ウーマン・リブ」に連なる人々がしてきたわけです。田中美津さんも、そのなかのひとりでした。

● 「かけがえのない」、「たいしたことのない」わたしという存在

最初にご紹介した、「かけがえのない、たいしたことのない私を生きる」という言葉に戻りたいと思います。この言葉のおもしろいところは、“かけがえのない”わ

たしであると同時に、でも“たいしたことのない”わたし、という言葉が重ねられている点です。わたしたち一人ひとは、かけがえのない存在なんだよ、というメッセージは、しばしば聞きます。でも、同時に、“たいしたことのない”と言ってしまうあたりは、とてもおもしろいと思うのです。

女性の主張というと、まだまだ、冗談の通じない、堅苦しいものであるとイメージされることが多いと思います。たとえば、女性は感情的だと言われたりすることが当時も多かった。でも、女性として育てられる場合、言葉を紡いでいたり、人前で話をしたりという訓練を受けてこなかった人たちが多い。だから感情的に出してしまうのは、ある意味、仕方がないわけです。わたしは、田中美津さんは、「そんなのはあたりまえじゃないか」と開き直った人だと思います。「感情的で結構だ」と開き直っていく、むしろ、感情的な部分、感性を大切にしていこうというのが、わたしが田中美津さんから受けるメッセージです。

非常に有名なエピソードがあります。田中美津さんは、こんなことを書いています。女性たちが集まった会議で

あぐらをかいて座っている。普段から、「女らしく」しなさいという世間や身近な人々からのメッセージをシャワーのように浴びてきた人々にとって、“あぐらをかく”のは、一種の反抗のようなものです。つまり、押しつけられた価値観への抵抗です。「女らしくない」と見られる。そして、そのようなあぐらをかいている女性たちのあいだに、ふと、好みのタイプの男性が入ってくる。それを見た瞬間、パッと、理性的に考える間もなく、美津さんはあぐらの足を組み換えてしまうと言うんですね。いくら「女性解放」と叫んで、性差別、つまり、女性に対する差別に抗い続けようとしても、「世間が女らしさと考えている像に自分が迎合してしまうんだ、そんな自分があるんだ」ということを田中美津さんは言うわけです。

でも言っていることとか、やっていることに多少、矛盾があったとしても、世の中で言われている「女らしさ」に抵抗しようと、たとえば、結局は無意識にあぐらを組んでいる足を組み換えてしまうような「女らしさ」を、骨の髄までしみ込ませている自分であったとしても、そのなかで、ときに、「とり乱し」ながらであっても、日

常のただなかで生きていくこと。さまざまな部分があって、それが丸ごと自分なんだ、ということだと思います。

“かけがえのない”存在であっても、でも同時に、“たいしたことのない”自分というのは、多少、矛盾を抱えていても、それが丸ごと自分なんだという肯定を受け入れていこうという思いが、その底に流れているわけです。誰にも代えることのできない大切な自分という存在、でも同時にたいしたことのない自分、必要以上に構えてしまったり、気負ったりするのではなく、矛盾とか、カッコ悪い部分もあるけれども、肩の力を抜いてやっていこうよ、というメッセージが、そこから読み取れるのではないのでしょうか。

●「かけがえのない」自分の難しさ

しかし、それ以前に、皆さんは、自分が「かけがえのない」存在であることに気づくチャンスが、日常生活のなかにありますか？

また、これまでにはありましたか？ わたしが大学生と接していて感じることなのですが、「自分って、すごく大事な存在なんだな」と、日常のなかで立ち止まって

気づくチャンスは、どんどん減っているような気がして仕方がありません。「かけがえのない、たいしたことのない私を生きる」という言葉はおもしろい。でも、“たいしたことのない”存在として、肩の力を抜こうとする以前に、わたしたちの社会のなかでは、「かけがえのない自分」を発見することすら、難しくなっているような気がしてなりません。

学生さんたちだけではなく大人の世界も同じことが起っているのだとは思いますが、“かけがえのない”自分に気づくチャンス、つまり、自己肯定感を得るチャンスが本当に減っているのではないかと感じる場合があります。言ってみれば、具体的に将来というほど遠くはない先行きの生活や経済的状況、社会の不安のなかで、自分を肯定するどころか、「蛸壺」のようなものをみんながつくって生活しているのではないかと考える場合があります。一人ひとりが深く狭い壺のなかに籠もってしまう、というイメージです。そのなかで、外からの攻撃を避けるために、必要以上の接触も避けて、自分を守ろうとする。自分の入り込んだ「蛸壺」を守ろうと必死になってしまっているのではないか。もちろん、自分を守るために必要

なこともあるでしょう。しかし、「蛸壺」に籠もってしまっているために、他の人とつながるチャンスがなかなかなくなってしまっていることは問題だと思います。

一方で、みなさんのなかでも利用している人たちは多いと思いますが、インターネットの世界がどんどん広がっているという状況もあります。そのなかで、雑多な情報がどんどん氾濫しています。インターネットの世界は匿名性が非常に高い。自分がどこの誰であるかを公開しなくても、コミュニケーションのようなものをとることはできる。その弊害として、特定の人々に対する誹謗中傷がなされることも多くあります。匿名性が、相手に対する攻撃性を増していく、そんな現象が増えているように思います。

一方で、自分の世界に、「蛸壺」に籠もっていること、そして他方で、インターネットを使って攻撃性を発揮していること、その双方には、大きく関連があると思います。

インターネットでの匿名性の攻撃は、言わば、「外向き」の攻撃として把握することも出来るでしょう。その攻撃は、「内向き」にも発される。最近、中学や高校の

養護教諭の方々に聞くと、たとえば、リストカットなどの自傷行為が非常に増えていると指摘されることがあります。それは、自分の身体に対して、攻撃が向いていくということの表れでもありますよね。行き場のない、やり場のない攻撃を、外に向けてしまうのか、内に向けてしまうか、その方向性のちがいがあただけです。ほかに発散方法が見つからずに、攻撃というかたちになって表れてくるわけです。そういう現状があるし、それはとても悲しいことでもあります。

わたしは、大教室での授業を担当しているので、とくに「人権」科目では、受講生のみなさんにコミュニケーション・カードを書いてもらっています。授業に関する質問や意見、感想などを書いてもらいます。大教室では、なかなか、そこにいる一人ひとりとは個人的なやりとりができないので、それを補うためです。去年の前期ですが、そのなかに、こんな一枚がありました。プライバシーの問題にもかかわるので、簡単にご紹介します。

「自分は心の病と共に生きている」ということでした。具体的には、うつ症状をもっていて、病院にも通っているということでした。春に入学したばかりだけれども、

大学での勉強の意味が見出せず、「生きている意味がわからない」。ご本人は「授業で読んでいただいて結構です」と書いていたので、教室で紹介することにしました。授業のテーマ（ジェンダー論）とは、直接的に関係がないかも知れないけれど、とても大切なメッセージであると判断したためです。

すると、その一枚をきっかけとして、それを聞いた人たちが、いろいろ反応をくれたのです。何週間か、そのやりとりが続きました。そのなかには、自分の書いた文章をぜひ紹介してください、というものもありました。「“今、生きている意味がわからない”と言うけれど、生きているなかで、探し続けるしかないのだし、いずれ見つかる日が来るかもしれない」とか、「自分も生きている意味などないと思い、死を考えた。でも、とにかく意味なんて、生きていることでしか見つからないと思った」とか、そういうメッセージが寄せられました。最初の一枚をきっかけとして、教室のなかで、コミュニケーション・カードを通して、やりとりが始まったわけです。もちろん、逆に、「生きている意味なんか考えている暇があったらアルバイトでもして働くべきだ。あなたは甘

い」というようなメッセージもありました。

何度かにわたって、皆さんのメッセージをいくつかを紹介しながら、ふと思ったんですね。「なぜ、同じ教室にいながら、教壇に立っているわたしだけが、みんなの言葉の媒介をしているのだろう」と。同じ教室のなかに、同じ時間帯に、たとえば「うつ」という症状を抱えていたり、「生きている意味ってなんだろう」と考えている学生さんがいる。そしてまた、同じように悩んでいる人たちがいるわけです。しかし、お互いに話をできずにいるわけです。言ってみれば、「出会う」チャンスがないわけです。出会うチャンスから疎外されている、ということだと思います。先程、「蛸壺」にたとえてお話しましたが、ここにも「蛸壺」がたくさん並んでいる様子が見てとれます。教壇に立つわたしが、皆さんのことをあまり知らないにもかかわらず、メッセージを媒介するという姿は、「不自然」なものだと思います。コミュニケーション・カードという授業での方法を媒介しなくても、学生さん同士がお互いに話ができたら良い。しかし、その「出会い」のチャンスが分断されたままである状況なのです。

自己肯定感が下がっている。自己肯定できる人たちが減っている。たとえば、わたしの実感は、この教室での出来事に象徴するように、なかなかつながる、出会うチャンスが実現できないということから生まれてきています。つまりは人と人が分断されているわけです。ほんとは出会うチャンスがあるのに、そこに何か大きなハードルがあるように感じてしまう。もしくは、実際に、社会のなかでハードルが置かれていたり、境界線が引かれていたりする。そういう状況があるのだと思います。だからこそ「かけがえのない自分」ということを発見することができない。「あなたは大切な一人なんだよ」というメッセージすら与えられていないと感じてしまうわけです。そういう分断された状況が、どんどんと広がっている気がしてなりません。

● 「いじめ」の諸問題

今日のテーマは「いじめの構造」としました。先程、八木先生からお伝えいただいたように、「いじめ」というのは、もちろん差別の問題とほぼ同じ意味として考えられ得ると思います。「いじめ」という言葉は、数年前ま

で、あまり深刻に受け止められてこなかったと思います。しかし、近年、大きな「社会問題」として認識されてきました。

たとえば昨年（2006年）には、「いじめ」を受けていた小学生、中学生が、自らのちを絶つというケースが相次ぎました。いや、“相次ぎました”と表現することは問題かもしれません。一時期、マスメディアでいくつも採り上げられたということです。わたしは、その採り上げられ方はちょっと異常だったのではないかと思います。とくにワイドショーを見ていると、「なぜ、この子は自殺に至ったのか。なぜ、自殺に至るまで放置されたのか」ということを採り上げていくわけです。そしてまた次の週に「また、いじめによる自殺」という報道がされていく。わたしはそれを見ていて、とても怖いことだと思いました。しばしば表現されていたことではありませんが、「いじめによる自殺の連鎖が起こった」ということです。そう表現しながらも、報道は、その「連鎖」を断ち切ろうとしていたのだろうか。疑問に思ったから、怖いと感じたわけです。

なぜ、自らのちを絶つというという事態が「連鎖」

を起こしていくのでしょうか。そこには、マスメディアの報道の仕方も、結果的には加担していたと言わざるをえないと思うのです。というのは、とくにワイドショーなどを中心として、さまざまな報道は、いじめられている人たち、そこで追い込まれている究極の状況にある人たちに、皮肉にも、「こういう抗議の仕方がある」ということを教えてしまっているのではないかと思うのです。だからこそ、「連鎖」が起こっていく回路がつけられていく側面があったのではないかと思うのです。

「こういう悲惨な状況のなかで、この子は死んでいきました」とか、「この学校はその悲惨な状況に対して、対応できませんでした」ということしかワイドショーは採り上げていかない。そのような報道は、いじめられて、追い詰められて自らのちを絶った人たち自身の悲惨さしか採り上げません。それは、誤解を受けるかもしれませんが、裏返して言えば、ある意味で、被害者自身を「英雄視」するようなメッセージを含んでいるものではなかったか、と思うのです。そのなかで、死を選べば、自分の身に起こったことに多くの人々が注目する、誰にも聞かれなかった事柄が聞かれるようになる、という方

法を、報道自体が、皮肉にも、提示していく。「連鎖」が起こっていくというのは、起こった事実を誰にも共有できない、そういう追い詰められた状況にいるいじめの被害者に、抗議の方法として「死んだら、遺書を残したら、誰かが誰かに伝えてくれるんだ」という、そういう最後の最後の期待というものを生み出してしまったのではないかと思うわけです。これは非常に悲しいことだと思います。このように、「こういう抗議の仕方がある」ということを伝えてしまったことは、一番大きな問題です。

では、どのような伝え方をすれば良いのでしょうか。わたしは「結論」めいたものを伝えようとする、その拙速さが問題なのではないかと思います。甘い考え方もしれないけれど、起こっているさまざまな事柄に対して、「一緒に悩んでいこう、一緒に考えていこう」というメッセージを伝えていくこと。同じ目線に立つ、ということとは、そういうことなのではないかと思います。

なぜ、周りの人たちは追い詰められている状況に気づくことができなかつたのか。抗議の意味で、自ら死を選ぼうとしている人たちが、ワイドショーを見ている人た

ちの周囲にもいるかもしれないのに、気づくことができない。同じような状況にいる人たちが目の前にいるにもかかわらず、でも状況を改善できなかったという現実があるわけです。

すべてをそこに還元してはよくないのかもしれませんが、わたしは、先にお話した、「蛸壺」が並んでいる状況を思い浮かべてしまうわけです。すでにさまざまな情報がある。そして、いまある状況を必要であれば変えていくようなチャンスもある。しかし、「蛸壺」の殻のなかに閉じこもって、隣の人と手を取り合おうとしない。「いじめ」の問題にしても、そういう状況があるのではないかと思います。そして、人を死にまで追い詰める状況を放置してしまっているわけです。

もちろん、自殺の問題は、子どもたちだけに起こっているわけではありません。日本においては中高年の自殺も増えているようです。自殺者は1997年に急増して3万人を超えたと言われています。その後、8年間連続で3万人を超えているという統計が出ています。97年に急増したといっても、それまでに数として上がってこなかった事例もたくさんあると思います。また、いまも自殺者と

して数として上がってこない人たちもたくさんいると思います。そういう意味で3万人を超えた自殺者というのは一つの指標でしかないと思います。しかし、現実には大きな問題としてあるわけです。調査によると3万人を超える日本の自殺者というのは、統計で出ている国によって採り方は違うと思いますが、これも一つの指標として聞いていただきたいのですが、世界では10位だそうです。たくさんの国々があるなかで10位、かなりの数ですよ。大人の場合も、たとえば、過労死の問題や、仕事のなかで自殺に追い込まれていくケースがあります。これも言ってみれば、大人の間での「いじめ」の問題が含まれていると思います。しかし、大人の場合、「いじめ」と認識することが非常に難しい。「いじめ」は、子どもがかかわる場に起こる、という思い込みがあるからです。つまり、大人のなかで起こっている「いじめ」は、被害者も認識しづらいし、ましてや加害者はその自覚もない、指摘されても認めることなどできない、という現実が横たわっていると思います。

自殺者があまりにも増えている状況を憂い、国会で去年（2006年）、「自殺対策基本法」が成立しました。自殺

という事柄を「個人の問題」としてとらえていたところから「社会の問題」としてとらえなおしていこうとする、国の対策として必要だということを認識する。そういうきっかけが生まれました。しかし、ここでも「社会の問題」、「国の対策」だけを表面的に採り上げたとしても、その背景にある問題をきっちりとらえていくことがなければ、問題は解決しないと思います。先程言いましたように、一緒に悩んでいく、一緒に物事を考えていく、そのなかでつながりを見つけていく、非常に抽象的なことですけれども、そういうことを日常のなかで具体的に繰り返していくなかでしか、解決への道筋はないのではないかと思うわけです。

自殺に関して、いじめの問題と絡めてお話をしてきました。では大学ではどのような問題があるのか、つぎに考えていきたいと思います。

●大学での「いじめ」——ハラスメントの問題

大学でのハラスメントの問題についてお話をしていきたいと思います。みなさんが入学式のときに受け取った資料のなかに、3種類のリーフレットとパンフレットが

あります。先程、八木先生が、「穴のあくほど読んでほしい」とご紹介されたものです。まず、取り出して、確認してみてください。花園大学セクシュアル・ハラスメント・ガイドライン、花園大学キャンパス・ハラスメント・ガイドライン、リーフレット「STOP!セクシュアル・ハラスメント」です。この3つの資料が、みなさんが卒業されるまでに何らかのかたちで役に立つことがあるかもしれません。なくしてしまったら、学生課にも置いてあるそうですので、とにかく、このような資料があることを、頭の片隅にでも置いておくようにしてください。

これらの資料には、「セクシュアル・ハラスメント」や、「キャンパス・ハラスメント」という言葉が出てきます。「セクシュアル・ハラスメント」とは、みなさん、「セクハラ」という言葉として聞いたことがあると思います。アメリカ合衆国でつくられた言葉で、その後、日本に輸入された言葉です。なぜ、当時、日本語にせずカタカナのまま使われてきたのか。当時、この概念を日本で使っていこうとした人たちは、「性的嫌がらせ」や「性的いじめ」という言葉も考えたそうです。しかし、20年ほど前の日本の状況を考えると、「嫌がらせ」や

「いじめ」という言葉では、軽く扱われるのではないかという懸念がありました。深刻な問題としては認識されないと考えたわけです。「セクシュアル・ハラスメント」というのは重大なことで、ときには人を死に追いやるようなものも含まれる。そのような深刻な問題であると伝えていくためには、「性的嫌がらせ」や「性的いじめ」という訳語を当てはめるよりは、そのままのカタカナ言葉、「セクシュアル・ハラスメント」を使っていったほうが良いだろうと判断されたそうです。

「セクシュアル・ハラスメント」とは何かについて、少し説明をしておきましょう。簡単に言ってしまうと、「相手が望まない、相手の意に反した性的な行為、言葉、振る舞い」と定義されています。まず、「相手が望まない」ということが大切なポイントです。しかし、セクシュアル・ハラスメントというと、「性的な」という意味合いが必要以上にとらえられているのではないかと思うのです。みなさんは、どのような場面で「セクハラ」という言葉を聞いたことがありますか？ また、そのときにはどのような語られ方をしているか、覚えていますか？

たとえば、「セクハラ」という言葉を、インターネッ

トで検索すると、アダルトサイトの検索結果がいくつか出てきます。AVとかポルノグラフィーのひとつのジャンルとして、「セクハラ」という言葉が使われているわけです。「性的な」という部分だけが取り沙汰されて、言葉がひとりあるきしてしまっている状況を表わしていると思います。

しかし、先ほど「相手が望まない」ということが大切なポイントだと申し上げたのは、まさに、そこに問題の本質が横たわっているからです。セクシュアル・ハラスメントがなぜ起こるかという、人と人とのあいだにある権力関係が介在してくるからです。たとえば、大学での場合は、職員と学生のあいだ、教員と学生とのあいだ、また、学生同士のあいだでも先輩と後輩のあいだには、権力関係があります。アルバイトをしている人たちのなかには、働いている年数のちがいや、社員との関係など、そこにも権力関係があることを実感している人たちもいるかもしれません。言ってみれば、人間の関係性のなかには、「対等」な関係はなかなか存在しない。たえず、なんらかの権力関係があるのだと思います。つまり、人と人が出会って関係性をつくっていくところには、必

ず、なにがしかの力関係が生じてしまうわけです。年齢の差があったり、学年の差があったり、立場の差があったり、いろんなかたちがあると思いますが、とにかく力関係がそこにはあるわけです。

先程、八木先生は、「学生さんは大学の権利主体である」とおっしゃっていました。みなさんは学費を支払って、大学に在籍しているわけです。つまり、お金を払っている以上、サービスを受ける権利をみなさんは持っているはずだと思います。しかし、大学という場は、非常に不思議な場所で、ときに、学費を支払っている、サービスを受ける権利をもつ学生さんの側ではなくて、たとえば、教員の側が成績をつけたり、単位を出したり、卒業認定権を持ったりするがために権力関係のなかでは「上」になります。この点については、わたしも、パートタイムではあれ、教員の側にいる人間として自覚しなければならぬことだと思います。ただ、これは花園大学だけでなく、よその大学でもそうですが、一度教壇に立ってしまうと、あまり自分の権力に気づくことができない、振り返ることができない状況に陥ってしまう人たちが多いのです。わたしも身近なところでそのような例

をいくつか見てきました。とても残念なことではあります、それもまた現実です。権力とは、力を持っていれば持っているほど、本人はなかなか気づくことができない、自覚することができない仕組みになっているのかもしれない。

もちろん、ハラスメントは教員と学生とのあいだに起こるだけではありません。皆さんが、クラブ活動やサークル活動に参加される場合も同じことが言えると思います。来年、2回生になったとき、あたらしく1回生の人たちが入学してきます。そこでは、一年長く花園大学にいる皆さんが、新しく入学してくる人たちに対して、力をもってしまうということも起こります。

わたしがお伝えしたいのは、セクシュアル・ハラスメントやキャンパス・ハラスメントを考えるにあたって、「人と人との間には力関係、権力関係が介在しているのだ」ということを忘れないでほしいということです。権力関係があるがゆえにセクシュアル・ハラスメントが起こる、キャンパス・ハラスメントが起こる状況が生まれてしまう。そこになかなか改善されない状況があるということです。誰もが、被害者にも、加害者にもなりうる

可能性があるということ、どうか、覚えておいてください。

● “もしも” のときのために

先に確認していただいた三つの資料ですが、これがみなさんが卒業されるまでに役に立つこともあるかもしれないと申しました。もちろん、問題が起こらないほうが良いに越したことはないのですが、もし万が一、セクシュアル・ハラスメントやキャンパス・ハラスメントに遭遇したときに、思い出してほしいことがあります。最後に、この点についてお話しておきます。

もし、何か事柄が起こった場合、必ず誰かに話をするようにしてください。もちろん、話をする事すらしんどい、ということもあると思います。できるだけ、しんどかったことは忘れてしまいたいと思うからです。また、大学内で起こったことを、大学のなかで相談することはできない、と感じる人もいるかもしれません。その場合には、リーフレットの後ろ側に、セクシュアル・ハラスメント相談を学外の相談員が行っているという点を覚えておいてください。また、そのほかにも、さまざまな機

関が相談業務を行っていますので、そういうところを利用するのも、方法かと思います。

先ほど、権力関係というものは、力を持っている人ほど気づくことができないと言いました。その人に伝えようとしてもなかなか伝えられない、それがセクシュアル・ハラスメントやキャンパス・ハラスメントが解決できない一番難しいところです。しんどいことが起こって「もう嫌だ」と思っても「ノー」と言えない。「ノー」と言えない構造が、そこに権力関係があるがゆえに存在しているわけです。そのなかで、しんどさの回路を断ち切っていくためには、誰かに相談することが、まずは大切だと思います。

そして、もし、セクシュアル・ハラスメントやキャンパス・ハラスメントが起こったときに、被害者やサバイバーの人たち、そして周囲の人たちにお伝えしておきたいことが、それぞれ3点あります。

まず、被害にあった場合。一点目は「ひとりで頑張らない」ということです。繰り返しますが、信頼できる人を含めて、誰かに相談してくださいということです。そして、必要であればカウンセリングや病院へ行ってくだ

さい。二点目は「時間が必要だ」ということです。人は、すぐくしんどいことがあったとき、それを乗り越えようと、「もう一週間たったら大丈夫、もう半年たったから大丈夫、1年たったから大丈夫、これくらいたったから大丈夫」というふうに安心しようとしてしまうものだと思います。しかし、焦らなくても良い。自分の傷ついた心を回復していくためには、とにかく、時間が必要だと言うことです。そして、三点目に「責任は加害者にある」ということです。セクシュアル・ハラスメントの問題は、権力関係の問題だと言いました。しかし、その権力関係のなかにはまり込んでしまっている場合、被害者は「自分のせいではないか、自分が悪かったのではないか」と責めてしまうことが多い。自分のせいではないかと責めてしまう前に「加害者は害を加えた人で、被害者は害を被った人なんだ」ということを認識することが大事だということです。言い換えれば、自分のプライドを持つ、自尊心を持つということです。“かけがえのない自分”を持ち続けるということです。これらの点を頭の片隅にでも置いておいてください。

しかし、もし、頭の片隅においていても、自分の身に

起こったことと、なかなか切り結ばないということもあるかと思います。ハラスメントの問題とは、直接的にはつながらないのですが、こんなお話を聞いたことがあります。大石敏寛さんという方がいます。東京で、ゲイ（男性同性愛者）の人権活動をしている方です。かれはゲイで、HIV感染者でもあります（参照、大石敏寛著、1995年、『せかんど・かみんぐあうと』朝日新聞社；井田真木子著、1997年、『もうひとつの青春』文春文庫）。かれは、80年代後半、HIVやエイズが社会問題となった時期、同性愛者の団体のなかで予防啓発活動に携わっていました。たとえば、性行為をするときには、同性愛者だけではなく異性間でもそうですが、コンドームを使いましょうとか、そういう啓発活動をしていたわけです。しかし、ある日、HIV抗体検査に行ってみたら、陽性だったそうです。啓発活動をしていたし、どのようにHIVウィルスが体内に入るかの知識をもっていた。しかし、その知識と自分の実生活とのあいだをつなぐ回路がきちんと繋がっていなかったのだ、とおっしゃっていました。

知識と実生活の回路が寸断されている状況は、ハラスメントの問題に関しても同じことです。知識として知っ

ている人はたくさんいる。わたしも知識としてはもっています。しかし、それが実生活、つまり自分の身に起こる問題と結びついてくるかという点、とても簡単には結びつかない。そんな反省をもっています。ですから、みなさんには、「頭の片隅に置いておいてください」と言っていますが、知識としてあるということと、そして実生活を結びつけていくということと一緒に考えていただきたいと思います。

つぎに、周囲の方々にお伝えしておきたいことです。皆さんの多くは、セクシュアル・ハラスメント、キャンパス・ハラスメントの被害に直接遭遇するというよりも、その被害の近くにいる人たちの方が、おそらく多いことと思います。友人や知人が被害にあった場合、周りの人たちはどう対応していったら良いのでしょうか。この点についても、三点、お伝えしておきます。

まず一点目に、「被害者が安心して話せる空間をつくる」ということ。これは非常に難しいことです。差別の問題全般に言えることだと思いますが、被害者が不安とか孤立感を持たないように、“寄り添う”ことが大切だと思います。相談事を持ちかけられると、その人に対し

て、よいアドバイスをしないといけないと思って、頑張ってしまうことがあります。何か力になることを、励まそうとして言葉を語ろうとします。しかし、ときには必要以上の言葉は発さなくて良い場合もあると思います。ただ、その被害にあった人が、気持ちを整理をしていくために話をする場が必要です。そのために、一緒に場をつくる。被害にあった人が安心して話をする場をつくるために、ただその人に寄り添う、被害者のそばにいるということ、どうか覚えておいてください。

二点目に、「ひとまず、ありのままを受け入れる」ということです。程度にもよりますが、人はしんどいことが起こったとき、「ものすごく感情的になるはず」という思い込みがあると思います。「すごく怒るはず」、「すごく泣くはず」という思い込みですね。でも、しんどければしんどいほど、淡々としか語れないということもあるはずです。ときに、深刻な状況を、笑ってごまかしながら語らざるをえないこともあると思います。そんなとき、ひとまず、「この人はあまりしんどそうじゃないけど、笑って話をしているけど、軽く流してしまっているのだろうか？」と、立ち止まってほしいな、と思います。

クェスチョン・マークを、とりあえずつけてほしいなという事です。

そして、三点目に、「対処しきれないと感じたら必ず第三者に相談する」ということです。「あなたにだけ話をするね、誰にも言わないでね」という前置きで相談される場合、その秘密の守る約束を果たそうとして、「共倒れ」になってしまうケースがあります。真面目な人であればあるほど、「誰にも話してはいけない、と言われたから」と、しんどさを抱え込んでしまうことが多いと思います。抱え込んで共倒れしてしまったら何の意味もない。どうしても抱えきれない、対処しきれないと感じたら誰かに相談してください。

高校とは違って大学という場は自分で居場所を見つけないと、なかなか居場所がないところです。つながりのなかで居場所をみつけることができないと、どうしても、蛸壺のようなものが並んだかたちになってしまうと思います。ただ自分を守ることに必死になるのではなく、どうか蛸壺のあいだをつなげるような努力を一人ひとりがして欲しいと思います。その努力が、少しでも、ハラスメントの問題を解決していく糸口になるのではな

いかと、わたしは思います。もちろん、それがすべてではないとしても、孤立する人たちや状況をつくらないことが、何よりも必要だと思います。

●さいごに

今日は、最初に、わたしの好きな言葉をご紹介します。田中美津さんの、「かけがえのない、たいしたことのない私を生きる」という言葉です。「自分自身は、とても大切な存在なのだ」というメッセージを、皆さん、一人ひとりがこの大学で過ごされるなかで、受け取っていかれることを願っています。また一方で、頑張りすぎてしまわないように、肩肘を張りすぎてしまわないように、ときに肩の力を抜きながら、「でもたいしたことないよね」と、笑ってられるような関係性を育てていかれることを願っています。放っておくと、どんどん蛸壺のように分断された状況が生まれてしまいますが、出会って、関係性をつくって、そして自分を変えられていくことや、「人と人とは違うんだよね」と確認していくことで、一人ひとりが「かけがえのない、でもたいしたことのない自分」を発見していくことができるのだと思いま

す。ありがとうございました。

お わ り に

堀江先生、ありがとうございました。お話にありましたように、差別の問題はもっぱら差別する側の問題でありまして、差別される側に一切責任はありません。そのことをよくよく考えていただきたいと思います。

お話の最後に、なかなか大学というところに学生は居場所を見だしにくいといわれていました。実際、そのとおりなのでありますが、一つ意識していただきたいのは、私が主宰している人権教育研究センターの部屋です。裁松館4階にあります。これは教育機関ですから研究員の教職員もいますけれども、上回生や院生たちも結構出入りしていて、そこを居場所に定めている人たちも少なくありません。何か困ったことがあれば、いや、困ったことがなくても、時間があったら人権教育研究センターを覗いてみて下さい。そこに来れば、運がよければお茶とかお菓子にありつくことができるかもしれません。議論をしながら寛げる、実に大学らしい空間です。そこだけではなく他にも居場所はあると思いますが、一番居心地がいい場所ではないかという気がしますので、ぜひ利

用してみてください。

今日の堀江先生の講演は1時間弱でした。大学の授業は全部90分、1時間半です。多分、諸君は慣れるまでお尻がむずむずしてきたりして、退屈したり、あくびしり、寝たりすることがあるかもしれません。しばらくの間はやむをえざるところもあるんだけれども、いつまでもそれでは困ります。大学には大学の文化というものがありますので、それに早く馴染むよう努力して下さい。

みなさんは大学に来たことで、かつて経験したことのない自由を経験することになります。何をしても、何をしなくても、すべて自由です。我々は原則的にみなさんに干渉することはいたしません。そういう意味での自由は十分にある。しかし流されてしまうと元も子もないということになります。そのあたりをよく考えたうえで、十分に自由を満喫して下さい。(八木)